

18. β ブロッカーの投与により心機能とともに ^{201}Tl 心筋 SPECT 上、心筋灌流の改善を認めた拡張型心筋症の1例

武藤 浩 白崎 裕乃 南條 修二
山科 昌平 新井 久代 細井 宏益
飯田美保子 山崎 純一 森下 健

(東邦大・一内)

拡張型心筋症(以下 DCM)に対し β ブロッカーの投与により心機能とともに ^{201}Tl 心筋 SPECT (以下 SPECT) 上、心筋灌流の改善を認めた1症例を経験したので報告した。症例: 20歳, 女性。咳嗽, 胸痛および動悸にて近医受診。心電図上室性頻拍が認められ, 胸部 X-P 上心拡大が認められたため, 精査治療目的にて当院に入院となった。入院後心エコー, 心臓カテーテル検査, 心筋生検等にて DCM と診断した。入院当初, 安静時 TI 心筋シンチにて前壁および中隔の一部に欠損が認められ, 左室駆出率は30%台と低下していたが, 心不全の改善目的にて β ブロッカー(プロプラノロール)を投与開始したところ血行動態は改善し, それとともに SPECT 上, 欠損の改善が認められた。DCM の SPECT 上の欠損の成因, 機序としては, 心筋の線維化だけでなく, 冠血流の予備能の改善等の関与も考えられた。

19. 位相解析法における Amplitude image で広範囲な無収縮域を認めた前壁中隔梗塞の一例

白井 和胤 井出 満 (東海大・一内)
鈴木 豊 (同・放)

心プールのスキヤンが心室の壁運動異常の検出に有用であることが知られている。今回, 位相解析法および因子分析法を用いて, 巨大な無収縮域を認めた前壁中隔梗塞を経験したので報告する。症例は胸痛の既往のある48歳男性で, 心電図異常精査目的で来院。心電図所見および TI スキヤンより前壁中隔梗塞の所見と, 心エコーで心室瘤の存在が示唆された。心プールのスキヤンによる位相解析法の振幅像で巨大な無収縮域を認め, 因子分析法により同部位が正常左室収縮とは逆位相を示し, 心室瘤と考えられた。左室造影で前壁から心尖部にかけての心室瘤の存在を確認し, 位相解析法で無収縮域を認めた場合の心室瘤同定に因子分析法が有用であると考えられた。

20. Arteriosclerosis obliterans の RI-angiography の研究

篠原 照彦

(国立水戸病院・放)

1987年4月から1992年1月までの約5年間に A.S.O. の疑いで122例に $^{99\text{m}}\text{Tc-HSA}$ による RI-angiography を行った。所見のあった例は80症例で, その検討を行った。

患者は男性72名(40~87歳, 平均年齢68歳), 女性8名(平均年齢66歳)。

所見のあった主な血管は, 腹部大動脈と両側総腸骨動脈の広範囲にわたる変化は4例, 以下多い順に両側総腸骨動脈36例, 左総腸骨動脈28例, 右総腸骨動脈9例, 腹部大動脈1例, 腹部大動脈と左総腸骨動脈1例, 腹部大動脈と右総腸骨動脈1例, 月別による患者数からは, 季節による偏りは認められなかった。一部の症例で放射線被曝のない MRI, US 等と比較検討も行った。

むすび

1. 男女比は9:1で男性に多い。
2. 主病変は左総腸骨動脈に多かった。
3. 診断上は Dynamic study の First pass が有用であった。
4. 高齢で有痛者であることを考慮すると, 現状でも他の検査法と比較してルーチンの検査法としての意義は高いと思われた。

21. $^{99\text{m}}\text{Tc-HSA-D}$ による RI プレチスモグラフィの検討

田中 格 守谷 悦男 関根 広

川上 憲司

(慈恵医大・放)

浅原 朗

(JR 東京総合病院・放)

RI plethysmography についてその精度, 有用性の検討を行った。対象は '85年1月~'92年2月まで慈恵医大病院で RI plethysmography を行った97症例である。本法は, 静脈圧迫時の radioactivity 変化量と血管内 radioactivity の逆数の積 ($\Delta C/C - C_0$) が血流量に比例することを利用している。

血流量については RI plethysmography で求めた値と Admittance plethysmography で求めた値とを比較したところ高い相関が得られた。

$^{99\text{m}}\text{Tc-HSA-D}$, $^{99\text{m}}\text{Tc-RBC}$, $^{99\text{m}}\text{Tc-HSA}$ で血管内残留